

看護学教科書にみるチーム医療に関する内容の分析

Discriptions of Team Approach to Health Care in Nursing Textbooks

真継 和子, 竹村 淳子, 山内 栄子, 小林 道太郎, 森山 文則

Kazuko Matsugi, Junko Takemura, Eiko Yamauchi, Michitaro Kobayashi,
Huminori Moriyama

キーワード: チーム医療, 看護職の役割, 看護学教科書

Key words: team approach to health care, role of nursing, nursing textbooks

I. はじめに

医療の高度化・複雑化が加速する中で、質の高い、安心かつ安全な医療が求められる今日、医療のあり方としての「チーム医療」が注目され、様々な医療現場でチーム医療の実践が広まっている。厚生労働省はチーム医療を推進するため、日本の実情に即した医師と看護師等の協働・連携の在り方等について検討を行い「チーム医療の推進に関する検討会報告書」(厚生労働省, 2010)を提示した。その中で、チーム医療を推進するための基本的方向を示し、様々な取組を進める必要があると述べており、チーム医療は今後、加速的に推進されることが予想される。

このような動きと連動して厚生労働省は、看護基礎教育に関しても「今後のチーム医療の推進や他職種との役割分担・連携の進展が想定される中、いかなる状況に対しても、知識、思考、行動というステップを踏み最善な看護を提供できる人材として成長していく基盤となるような教育を提供することが必要不可欠」との見解を示している(厚生労働省, 2008)。次世代を担う看護職がチームの一員としての自覚をもって行動するには、就業後の医療現場だけでなく、看護基礎教育の段階からチーム医療への理

解を深め、チーム医療が推進できる基礎的資質・能力を身につけることが重要であると考ええる。

チーム医療の現状をみると、実践活動で専門職連携の良さを実感しつつも、それが困難な現実との間で葛藤があるとの報告や(大塚他, 2006)、医療機関における専門職にとってのチーム医療への認識には差があり(石川他, 2008)、チーム医療の実現を困難にしている理由の一つとなっているとの報告もある。すなわち、従来からチーム医療が重要であるとしながらも、依然その実践にあたっては難しさを抱えている(坂梨他, 2004; 松井他, 2010; 北村他, 2010, 奥村, 2011)。これらのことは、看護基礎教育におけるチーム医療に関する教育内容にも影響を受けていると考える。したがって、チーム医療に関する教育内容を検討し、学生がチーム医療をどのように捉え実践に結び付けていくかを明確にすることは、看護基礎教育の課題でもある。

先行研究をみると、種々の大学が専門職連携能力の育成に取り組んでいることが報告されている(平田他, 2002; 酒井他, 2008; 金谷, 2010)。その中で、演習や実習を通して学生らがチーム医療を体験することの重要性が指摘されている。この体験的学習に

は知識と体験の両者が必要であり、知識と体験を統合して初めて成立するものであると考える。しかしながら、専門職連携教育などチーム医療に関する教育方法についての報告はあるものの、チーム医療に関する教授内容、すなわち知識が整理網羅されたものはなかった。

チーム医療に関する教育内容を検討するためには、その前提として現在の看護基礎教育の中でチーム医療がどのように教えられているかを把握しておく必要がある。チーム医療について、どのようなことが伝えられているのか一般的な傾向を知るためには、看護学の教科書での記述が一定の目安となるであろうと考えた。

今回、現在の看護学の教科書が、チーム医療についてどのように述べているかを分析し、今後の教育についての若干の示唆を得たので報告する。

II. 方法

1. 対象文献および記述の抽出方法

2010年12月現在において看護学の教科書を発行している出版社の中から、(1)カリキュラム改訂に合わせて出版・改訂している、(2)体系的かつ網羅的に各看護領域の教科書を出版している、という2条件を満たす4出版社の教科書を対象とし、うち基礎科目を除く専門基礎科目と専門科目の教科書(別巻含む)を調査した。それらの教科書から、チーム医療に関する記述部分を抜き出すために、チーム医療の同義語・類義語を検討した上で、目次あるいは索引に「チーム医療」「チームアプローチ」「看護の役割」「看護師の役割」のいずれかのキーワードが含まれている箇所を抽出した。

2. 分析方法

ベレルソンの内容分析の手法を参考に、次の手順で分析を行った。(1)チーム医療に関する記述を文脈ごと抜き書きし、(2)1つの記述内容ごとに記録単位に分割する。(3)記録単位を内容の共通性に従ってサブカテゴリ、カテゴリへと集約し、(4)各サブカテゴリ、カテゴリごとの記録単位数を算出する。結果の妥当性・信頼性を高めるため、これらについては統

一した見解が得られるまで研究者間で協議を重ねた。

III. 結果

1. 対象文献

2010年12月現在、4出版社から発行されている看護学の教科書は、A出版社65巻、B出版社46巻、C出版社67巻、D出版社37巻の合計215巻であり、そのうちチーム医療に関する記述を含む教科書は、A出版社14巻、B出版社16巻、C出版社12巻、D出版社5巻であった。そのなかには、チーム医療に関する記述が複数の箇所に見られるものもあった。

2. 教科書におけるチーム医療の記述内容

47巻の教科書に含まれるチーム医療の記述は753記録単位であった。それらは内容に従って10カテゴリ、93サブカテゴリに分類された。なお、以下の【 】はカテゴリ、〈 〉はサブカテゴリ、()内は記録単位数を示す。

得られたカテゴリとそれぞれの記録単位数は、【チーム医療に必要なこと】(265)、【チームにおける看護職の役割】(208)、【チームの形】(120)、【チーム医療の具体的方法】(48)、【チーム医療の必要性】(35)、【チームにおける看護職以外の役割】(23)、【チーム医療のメリット】(22)、【チーム医療の目的】(20)、【特殊環境下におけるチームの役割】(7)、【チーム医療の課題】(5)であった(表1)。これらのカテゴリのうち記載数の多かったのは、順に【チーム医療に必要なこと】(265)、【チームにおける看護職の役割】(208)、【チームの形】(120)であり、これらはいずれも半数以上の教科書に何らかの記載がされていた。逆に少なかったカテゴリは【チーム医療の課題】(5)や【特殊環境下におけるチームの役割】(7)で、ごくわずかな教科書に限って記載されていた。各教科書に記載されているカテゴリの内容構成は教科書によって異なっており、各教科書に10カテゴリのすべてが網羅されているわけではなかった。

10カテゴリはそれぞれ複数のサブカテゴリで構成されていた(表1)。もっとも記述数の多かった【チーム医療に必要なこと】(265)のカテゴリは、17サブカテゴリで構成されていた。ここに含まれるサブ

表1 教科書におけるチーム医療の記述内容

カテゴリ (記述数)	サブカテゴリ (記述数)	カテゴリ (記述数)	サブカテゴリ (記述数)
チーム医療に必要 なこと (265)	各専門職の役割の遂行 (42)	チーム医療 の具体的方 法 (48)	連携のためのシステムをつくる (8)
	目標の共有 (28)		目的・状況に沿ってカンファレンスをする (7)
	連携 (26)		連携をする (6)
	協働・協調 (25)		カンファレンスで情報を交換する (6)
	コミュニケーション (25)		目標の達成状況を確認する (6)
	対象についての共通理解 (18)		各専門職がアセスメントする (4)
	チームメンバーの相互理解 (18)		カンファレンスで方針を決定する (4)
	情報の共有 (18)		電子カルテ・記録物で情報を交換する (2)
	チームメンバーの相互尊重 (12)		時機を逸せず継続する (1)
	実態に合った役割分担 (12)		情報交換を行う (1)
	自分の能力を高める (11)		優先度の高い課題から対応する (1)
	アサーション (8)		患者の目標を確認する (1)
	リーダーシップ (6)		共通した評価表を使用する (1)
	チームとして一貫したケア (5)	チーム医療 の必要 性 (35)	生活・療養の場が拡大している (11)
	平等な立場 (5)		多様な専門家が必要である (4)
	調整者の存在 (4)		継続的支援が必要である (4)
チームに おける看 護職の役 割 (208)	チームの一員としての自覚 (2)		社会構造が変化している (3)
	ケアチームの調整をする (35)		全人的アプローチが必要である (3)
	診療の補助をする (24)		価値観が多様化している (3)
	チーム内での情報共有を可能にする (22)		患者の問題が多様化している (3)
	情報収集をする (20)		患者・家族の視点が重視される (2)
	他部門との連携をはかる (13)		多様なニーズに対応する (2)
	患者・家族をアドボケートする (12)	チームにお ける看護職 以外の役割 (23)	医師 (7)
	療養の世話をする (11)		理学療法士・作業療法士 (4)
	ADLの拡大・向上を支援する (11)		栄養士 (2)
	必要な支援を判断する (11)		ソーシャルワーカー (2)
	家族への支援をする (9)		言語聴覚士 (2)
	身近な存在である (7)		薬剤師 (2)
	患者にとって最善のことをする (7)		ケアマネージャー (1)
	心理的援助をする (6)		臨床工学士 (1)
	患者の教育・指導をする (6)		家族 (1)
	看護管理を行う (5)		ボランティア (1)
	患者の安全を確保する (4)	チーム医療 のメリッ ト (22)	医療が効果的に提供できる (13)
	患者の苦痛を緩和する (3)		患者の意思が反映されやすい (5)
	多職種から得た情報を活用する (2)		知識・技術が補完できる (2)
チームの 形 (120)	多くの専門職・非専門職が含まれる (66)		総和以上の成果 (1)
	チームメンバーの関係性による区分 (13)		相互に学びあう (1)
	チームの中心は対象者である (10)	チーム医療 の目的 (20)	QOLを高める (8)
	医療の目的による区分 (8)		質の高いケアを提供する (7)
	状況に応じてチームメンバーは構成される (6)		継続的なケアを提供する (3)
	医療提供チームの中心は看護職である (5)		患者・家族・医療者が納得できる医療をする (2)
	患者はチームの一員である (3)	特殊環境下 におけるチ ームの役割 (7)	災害医療 (5)
	チーム医療の対象に家族が含まれる (3)		救命救急 (1)
	チームの機能による区分 (3)		手術室 (1)
	患者の目指す目標が中心である (1)	チーム医療 の課題 (5)	コミュニケーション不足を改善する (4)
	医療提供チームの中心は医師である (1)		権限と責任を明確にする (1)
	患者にかかわる機関が含まれる (1)		

カテゴリは、記述数の多い順に、〈各専門職の役割の遂行〉(42)、〈目標の共有〉(28)、〈連携〉(26)、〈協調・協働〉(25)、〈コミュニケーション〉(25)、〈対象についての共通理解〉(18)、〈チームメンバーの相互理解〉(18)、等である。次に記述数の多かった【チームにおける看護職の役割】(208)は、18サブカテゴリで構成されていた。ここに含まれるサブカテゴリは、記述数の多い順に、〈ケアチームの調整をする〉(35)、〈診療の補助をする〉(24)、〈チーム内での情報共有を可能にする〉(22)、〈情報収集をする〉(20)、〈他部門との連携をはかる〉(13)、〈患者・家族をアドボケートする〉(12)、〈療養の世話をする〉(11)等であった。

各教科書に記載されているサブカテゴリについてみると、【チーム医療に必要なこと】について、一部の教科書には、各専門職間の〈コミュニケーション〉、〈目標の共有〉、〈チームメンバーの相互理解〉、〈チームメンバーの相互尊重〉、〈各専門職の役割の遂行〉、〈実態に合った役割分担〉、〈連携〉、〈協働・協調〉、〈調整者の存在〉、〈対象についての共通理解〉、〈情報の共有〉、〈チームの一員としての自覚〉という12サブカテゴリの記述が含まれていた。他方、同じ専門科目の別の教科書には、〈目標の共有〉、〈チームとして一貫したケア〉、〈チームメンバーの相互尊重〉、〈各専門職の役割の遂行〉、〈連携〉、〈協働・協調〉、〈リーダーシップ〉の6サブカテゴリの記述が含まれており、先述の教科書とは一部が共通するだけであった。同じカテゴリに関してであっても、各教科書にすべてのサブカテゴリが含まれているわけではなかった。

サブカテゴリのうちには、互いに相容れない内容のものも一部にみられた。特に【チームの形】に関する記述では、教科書によって、〈チームの中心は対象者である〉とするものと〈患者の目指す目標が中心である〉、〈患者はチームの一員である〉とするものがあった。また〈チーム医療の対象に家族が含まれる〉とする教科書と、家族をチームの一員とする教科書とがあった。さらに医療提供チームについて、〈医療提供チームの中心は看護職である〉とする教科書と、〈医療提供チームの中心は医師である〉と

する教科書とがあった。

IV. 考察

結果に示したように、カテゴリでは、【チーム医療に必要なこと】(265)の記述がもっとも多かった。これは、〈各専門職の役割の遂行〉、〈目標の共有〉、〈連携〉、〈協調・協働〉〈コミュニケーション〉など、全体として、チーム医療をその理念や「あるべき論」の側面から語るものとなっており、チーム医療の具体的な場面や状況を説明するものではない。また同様にチーム医療について一般的・理念的な形で説明するカテゴリとしては、【チームの形】(120)、【チーム医療の必要性】(35)、【チーム医療のメリット】(22)、【チーム医療の目的】(20)がある。これらを合わせると、抽出された教科書の記述内容のうちの約6割にあたる462の記述が、チーム医療に関して一般的・理念的な側面からの説明を与えるものとなっている。

逆に、より具体的な説明としては、【チーム医療の具体的方法】(48)、【特殊環境下におけるチームの役割】(7)があるが、これらは前述した理念的説明と比べると記述数が限られている。また、チーム医療の実践の中から明らかになってくると考えられる【チーム医療の課題】(5)の記述数も少ない。

このような教科書記述の傾向は、チーム医療をめぐる現状と重なり合うものであると考える。細田はチーム医療について、近年の急激な関心の高まりの中で、しばしばそれが「重要という共通理解がありながら、実現困難」とみられていることを指摘している(細田, 2002)。この指摘からすれば、チーム医療は重要だという理解があるため、その理想的なあり方や、実現のために必要な条件等は盛んに論じられるであろうし、また他方、具体的な実践がまだ十分広く行われるに至っていないため、それらに関する教科書の記述が相対的に少ない、という結果になると考えられる。

全体としては、看護学教科書におけるチーム医療の記述では、一般的理念的なことがらの説明が先行しており、具体的な実践に関する記述やそこからの課題といった内容はそれに比べてまだ少ないと言え

る。

チーム医療そのものの捉え方についても、教科書ごとに違いがみられた。結果に示した通り、各教科書によって記載内容は異なっており、【チーム医療の目的】、【チーム医療の必要性】のような基本的なことがらに関しても、これらがひとまとまりの定義として述べられている教科書はほとんどなかった。

また【チームの形】については、結果に示した通り、一部の教科書間で互いに相容れない特徴づけがなされていた。すなわち「チームの中心に誰（何）をおくか」、「患者やその家族をどう位置付けるか」、「医療提供側の中心となるのはどの職種か」、といった点について、異なった見解が示されていたのである。これはチーム医療における「チーム」とは何かという、もっとも基本的な部分に関する見解の相違である。

坂梨らは、医療専門職者のチーム医療の認識を調査し、それぞれの職種によるとらえ方の相違からチーム医療の概念を明確化する必要性があると述べている（坂梨他, 2004）が、これは現在も教科書レベルでは明確化されるには至っていないと言える。

チーム医療の中の看護職の役割に関しては、【チームにおける看護職の役割】（208）の記述があった。ここに含まれるサブカテゴリの中には、〈療養の世話をする〉、〈診療の補助をする〉等、必ずしもチーム医療だけに限らず、保健師助産師看護師法に明記された従来から行われている看護職の役割も含まれていた。これは、【チーム医療に必要なこと】のひとつに〈各専門職の役割の遂行〉が言われていることとも一致する。逆に、チーム医療を特に意識していると考えられるサブカテゴリとしては、〈ケアチームの調整をする〉、〈チーム内での情報共有を可能にする〉、〈他部門との連携をはかる〉などがあった。

これらの中でもっとも多く記述を含むサブカテゴリは〈ケアチームの調整をする〉（35）であった。多職種が関わるチーム医療は、チーム内相互の調整が不十分であると、受け手の患者にとっては多くの専門家に翻弄されるように感じる（細田, 2002）危険性もあるとされており、調整役としての看護師に対する期待は大きいと言える。調整に次いで多く言

及されていたものは〈チーム内での情報共有を可能にする〉（22）であった。看護職は医療職の中でも患者と接する機会が多く、心理的側面や感情的問題を把握しやすい立場にある。これらを他のチームメンバーに対して適切に伝えていくことが期待されていると言える。

まとめ

看護基礎教育においてチーム医療に関しどのようなことが伝えられているのか、その一般的な傾向を知るために、看護学教科書47巻を対象に、チーム医療に関する記述内容を分析した。その結果、看護学教科書におけるチーム医療の記述内容は、一般的理念的なことがらの説明が先行しており、具体的な実践に関する記述や課題といった内容が少なかった。また、チーム医療そのものの捉え方について教科書ごとに違いがあり、特にチームとは何かというもっとも基本的な部分について、相反するとらえ方があった。これらのことから、教科書レベルではチーム医療の概念についても共有された見解はないと言える。

チーム医療に関するよりよい教育内容と方法を検討するためには、教科書に記載が少なかった医療現場の実態について知る必要がある。今回の調査を踏まえた上で今後は、チーム医療を実際に担う医療職者自身がチーム医療をどのように捉えているのかを知り、そして、より具体的な実践内容や実践における課題を明確にしていくことを課題としたい。

文献

- Berelson, B., 稲葉三千男他訳 (1957): 内容分析 みすず書房.
- 後藤大輔 (2010): NST 活動7年目を経て 現状と課題, 香川労災病院雑誌, 16, 153-155.
- 平田美和・大塚真理子・大嶋伸雄・朝日雅也・井口佳晴・磯崎弘司 (2002): ヘルスケアチームとしての連携・協働の実習教育の試み, 埼玉県立大学紀要, 145-150.
- 細田満和子 (2002): チーム医療とは何か? チーム医療論 (鷹野和美編著) 第I章, 医歯薬出版株式

会社.

石川佳子・魚永英里・平佐田和明・中村さゆり・伊東美佐江 (2008): リハビリテーション領域におけるチーム医療に関する職位別認識, 日本看護学会論文集 看護管理, 38, 81-83.

金谷光子・真柄彰・遠藤和男・永井洋一・松井由美子・丸山敬子・島貫秀樹・高橋榮明 (2010): 多職種連携協働を目指す学生のための連携教育の実践 (第1報) チームアプローチを通して, 保健医療福祉連携 3(1), 10-19.

北村弘江・合田雄二・津村美由紀・竹林智子・大原京子・守屋智紗・渡辺由美・高畑知代・後藤大輔 (2010): NST 活動7年目を経て現状と課題, 香川労災病院雑誌 16号, 153-155.

厚生労働省 (2010): チーム医療の推進に関する検討会報告書, 2010年3月19日,

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/s0319-8.html>

厚生労働省 (2008): 看護基礎教育のあり方に関する懇談会論点整理, 2008年7月31日,

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/07/s0731-8.html>

松井由美子・真柄彰・遠藤和男・阿部明美・金谷光子・高橋榮明 (2010): 臨地実習校における Interprofessional Work の現状と課題, 保健医療福祉連携 3(1), 2-9.

奥村美奈子 (2011): A 県の医療機関における緩和ケアチームの活動の現状と課題, 岐阜県立看護大学紀要, 11(1), 63-69.

大塚眞理子・新井利民・朝日雅也 (2006): 卒業生にとっての4学科合同実習の学習効果～実施直後の調査と1年後の追跡調査から～, 埼玉県立大学紀要, 97-104.

酒井郁子・宮崎美沙子・山本利江 他 (2008): 千葉大学医療系学部基礎教育課程における専門職連携教育の取組み, 千葉大学看護学部紀要 第30号, 49-55.

坂梨薫・中村裕美子・山中道代 他 (2004): 専門職の職種, 職位別にみたチーム医療の認識に関する研究, 広島県立保健福祉大学誌 人間と科学 4(1), 47-59.